

日本初の国立重度知的障害児施設，秩父学園誕生の背景 ——ニーズ分析と入園事例の検討を中心に——

中 嶋 洋¹⁾²⁾・園 川 緑²⁾

¹⁾ 日本獣医生命科学大学・獣医学部獣医保健看護学科（非常勤）

²⁾ 帝京平成大学・現代ライフ学部人間文化学科

要 約 1958（昭和 33）年 6 月に誕生した秩父学園は，日本初の国立重度知的障害児施設として画期的な実践を行ってきており注目される。しかし，従来の先行研究では，その社会的背景や創設経緯が必ずしも明確にされてこなかった。そこで，本稿では，国会会議録検索システム，地元新聞紙，地方広報誌，雑誌（『手をつなぐ親たち』）などを用い，1950 年代を中心とした知的障害児を取り巻く環境や社会情勢を明らかにした。加えて，そうした福祉ニーズへの呼応として，実際にわが子を秩父学園に入園させ，その後，変化・成長の兆しを紙上で語った数少ない事例の一つである和久井千代の言説にも着目した。知的障害児福祉ニーズの形成から，知的障害児研究，秩父学園創設という一連の流れのなかでの知的障害児及びその親や，関係者たちの実践・思考がいかなるものであったのかを明らかにした。但しその反面，それらは氷山の一角であり，受け入れ対象外となった多くの子どもたちや成人後・親亡き後の障害者の生活保障のあり方を問う一つの契機ともなっていた。

本稿の研究成果を手がかりにし，同学園初代園長の菅 修の思想，同学園のこれまでの実践的効果，同学園と他施設との連携などについて明らかにすることが今後の課題である。

キーワード：国立重度知的障害児施設，秩父学園，和久井千代，手をつなぐ親の会（手をつなぐ育成会），知的障害児福祉

日獣生大研報 61, 87-97, 2012.

は じ め に

1. 研究の背景と方法

近年，知的障害児・者が事件・犯罪に巻き込まれることや，逆に痛ましい事件・問題を引き起こすという報道を未だに耳にする機会がある。後者のような社会不適応や問題行動を伴う知的障害児・者をめぐる対応策が本格的に議論され始めたのは戦後，昭和 20 年代に入ってからのことである。当時，人々の生活レベルの低迷や障害児・者の生活環境の劣悪化などの危機的状況のなかで，知的障害児・者への対応に国家をあげて力を注ぐことが，犯罪・事故防止につながるとされた。さらに，その後，そうした消極策に留まらず，個々人の福祉理解を進め，ひいては福祉社会の形成・地域福祉の向上に寄与するための有効的手段として注目されるようになった。

このような過程のなかで国立重度知的障害児施設「秩父学園」（埼玉県所沢市）は創られた。秩父学園は，「所沢市元航空士官学校分教場跡二万八千坪に本館と寮舎四むねのほか指導室，職業補導室など簡易鉄骨平屋建七百十坪，収

容人員は百人で，全国の児童相談所を通じて専攻するが，ろうあなどの不具の精薄児も収容する。学習のほか，窯業，養鶏，農耕などの職業指導は従来の施設と変わらないが，内科と精神科の専門医を常置させ医学的に保護する」¹⁾（埼玉新聞社 1958：4877（5））とこころとされた。

この秩父学園を日本における国立重度知的障害児施設の原型の一つとみなすことは，すでに周知の事実であろう。ところが，近年，知的障害児・者施設の閉鎖あるいは縮小をはじめ，今日の親亡き子（障害児・者）などをめぐる情勢は，彼らの生命と生活を擁護するための社会福祉援助を保障するという理念を根底から揺るがすまでになっている。このような重要な議論のなか，公的な知的障害児福祉施設や知的障害児教育の営みのあり方が，いかなる経緯や思想の下で生成し，展開され，障害者自立支援法などの今日の状況に連結しているのかという歴史的認識が欠如している感は否めない。このような意味で，秩父学園創設から，今日の知的障害児福祉実践へと至るまでの歴史的研究は，社会福祉に関わる者に対して何らかの視点を与えてくれるものと考え得る。

但し、秩父学園が1958(昭和33)年6月に創設された経緯やその背景を論じた先行研究はこれまで十分ではなく、通史の一部としての記述を除けば、例えば、青少年問題研究会(1959:56-61)、笹本治郎(1968:66-72)などのルポタージュ的な論文や、職業病闘争をとり上げ訴えた全厚生秩父学園支部(1976:54-59)、精神薄弱児(現、知的障害児)への処遇を検討した生川善雄(1982:10-16;1995:11-19)や鈴木四季(1990)などがみられるのみである。

そこで、本研究では、秩父学園誕生の背景とその経過を分析対象として、知的障害児への対応をめぐる国家的な取り組みやその必要性の認識のなかでみられた関係者(地域住民)の思想や実践についての検討を試みる。また、秩父学園の基盤構築に尽力した学園初代園長、菅 修の功績の大きさは注目に値するものであるが²⁾、ここではそうした個人的業績としてのみの評価をするのではなく、同時代の人々の秩父学園に関する幾つかの言及を拾い上げていくことで、新規事業誕生の背景を明確にすることを本稿のねらいとする。

秩父学園創設の背景と経過を分析対象に設定した理由を言及すれば、第1に、知的障害児福祉施設のスリム化や効率化が進みつつある昨今³⁾、そもそも国は1958(昭和33)年当時、いかなる理念や構想の下に関連施設を創ろうとし、国家的に何を護ろうとしたのかを出発点に立ち返って捉え直すことができることがあげられる。そして、その背景にあった福祉ニーズや生活課題を把握することで、秩父学園創設により対応が図られた点や図られ難かった点について、その内実の一端にアプローチできると考えている。第2に、現在までのところ、本論上の秩父学園誕生の背景に関する議論について、分析・考察した先行研究は管見の限り、ほとんど存在しないことも付記しておく。

倫理的配慮としては、2012(平成24)年3月26日に、本稿で用いた機関誌『手をつなぐ親たち』の引用の許可を、全日本手をつなぐ育成会事務局長の宮武秀信氏からいただいた。また、用語については、原文に従い、精薄児、重精薄、盲精薄など、当時の呼称を用いた箇所があるが、差別的ニュアンスは含まない。「障害」は今日、「障がい」とすべきだが、ここでは原則的には知的障害児と記すこととする。

2. 研究結果Ⅰ：1950年代の知的障害児をめぐる状況と福祉ニーズの分析

(1) 国会会議録検索システムの分析から

ここでは、まず秩父学園が創設される直前の1950年代の知的障害児を取り巻く状況を、国や地方自治体がいかに捉えていたのかを明らかにする。国会会議録検索システム(詳細検索)を用い、1955(昭和30)年1月1日～1958(昭和33)年7月1日までを、「精神薄弱」をキーワードとし検索すると、104件ヒットした。そのうち、秩父学園の創設年である1958(昭和33)年の発言に特に注目し、主なものを時系列に並べると以下ようになる。とりわけ、社会労働

委員会での議論が活発であったことが分かる。

○精神薄弱児施設等の拡充強化に関する陳情書(東京都議会議長上条貢外九名)(第五五五号)[昭和33年3月4日 第28回国会衆議院社会労働委員会 第16号]

○松永忠二君 その点について今お話が出てきておるわけではありますが、盲学校とか、ろう学校、養護学校への就学に関し適切な指導を行うということが出ておりますが、現実には精神薄弱児にいたしましても百万人もある。その中で養護学校へ収容されておるものが二万七千人程度ということになりますと、適切な措置を打ちたいとしても、そういう方の施設、設備が充実されていないければ、適切な措置が現実にはとれないのじゃないかというような点があるのですが。……[昭和33年3月13日 第28回国会参議院文教委員会 第7号]

○石田国務大臣 ……身体障害者だけでなく、精神薄弱者についてもそういうことを考慮して参りたい。それから身体障害者、精神薄弱者等について、未成年の間には不十分でありますけれどもいろいろ施設がありますが、成年に達するとなかなかこの処理がむずかしい問題もあります。そういうものを加味した訓練所を積極的に作って参りたい、こう思っておるわけあります。[昭和33年3月18日 第28回国会参議院社会労働委員会 第23号]

○政府委員(高田浩運君) 保育所のみならず、特に今お話には出ませんでしたけれども、肢体不自由児施設でありますとか、精神薄弱児施設でありますとか、そういういわゆる収容施設における保母さん、これらを含めて、非常に待遇その他が十分でないのにかかわらず努力をして、子供の保育ないし保護に尽力しておられるということは、今お話の通り、涙ぐましい努力だと私も思っております。こういった施設の運営については、いろいろな問題がありますけれども、やはり何と言っても保育力の充実ということが、これは第一の問題だと思いますので……[昭和33年4月15日 第28回国会参議院社会労働委員会 第23号]

○片岡文重君 ……こういう重度の精薄児も相当おる。これらについてやはり児童福祉の面から相当力を入れてやっていきたいと思うのですが、二十六国会でありましたが、時の厚生大臣神田さんは相当積極的な施設をすることをお約束されておりますし⁴⁾、特に、重精薄児については今後年々国立の施設を新設していく。とりあえず三十二年度の百名程度の収容施設は一つのモデルケースとして作ったのであるから、これを土台として今後計画を進めると、こういうお話であったのですけれども、この収容施設については残念ながら三十三年度は打ち切られております。しかし決して重度の精薄児が減ったわけではございませんので、今後の施設の増設ということについては特段の御配慮をい

ただきたい。……[昭和33年4月16日 第28回国会参議院社会労働委員会 第24号。傍点筆者]

- 片岡文重君 ……何とかしてこの収容施設をもっとたくさん作ってもらいたいと思うのです。神田厚生大臣のときには、国立の重度精薄収容の施設は、今回作られた百人収容の施設をモデル・ケースとして、なお今後総合的な研究を重ねて、具体的に計画を立てて実施する意向である。少なくともそういう努力をする、言われた言葉のそのまゝを記憶はいたしておりませんが、とにかく継続して具体的な努力を続けるという意味・約束をされておられるわけです。ところが、それが一年で打ち切られて、その後は進んでおらないのです。この際一つ、大臣は当然前大臣からの引き継ぎを受けておられるとは存じますが、この際、進んでおらない具体的な計画を促進されて、こういう声を出そうにも出し得ない不幸な人々の声なき声を十分聞いてやっていただくような努力を一つしてほしいと思うのです。……[昭和33年6月24日 第29回国会参議院社会労働委員会 第2号]
- 東北地方に国立精神薄弱児施設設置に関する請願（松本七郎君紹介）（第一一七号）[昭和33年7月9日 第29回国会衆議院社会労働委員会 第7号]

第28回～第29回国会（1958年）のなかで、都内から東北地方に至るまで、精神薄弱児施設（現 知的障害児施設）の拡充強化の陳情がなされていたことに加え（『第28回国会参議院社会労働委員会会議録』第24号、1958年4月16日など）、片岡文重議員による神田厚生大臣（当時）の約束反故への徹底追及などから、国会内部でも精神薄弱児（現 知的障害児）対策の充実が志向されていたことが認識でき

る。また、秩父学園創設がわが国のモデル・ケースの一つと位置づけられ、その拡張が望まれていたことが分かる。さらに、石田国務大臣の「成人への対処の難しさ」や、高田浩運政府委員の「保育力の充実」という指摘から、それら一連の問題が、施設建設といったハード面強化の課題に留まらず、人材養成、教育方法の確立、継続指導の強化など、ソフト面の早急な検討をも含む重要問題として認識されなければならない事柄であったことが窺い知れる。では、次に、こうした国会論議の内容が、地方自治体にどのように普及していったのかをみてみることにしよう。

(2) 『所沢市報』・『広報ところざわ』の分析から

ここでは、のちに秩父学園が創設された場所である所沢市を中心に検討する。同市における地元広報紙である『所沢市報』・『広報ところざわ』などを紐解き、知的障害児福祉関連記事を整理すると、表1のようになる⁵⁾。身体障害者福祉強調・職業更生週間をとり上げた『所沢市報』第69号、第2面（1957年9月10日）記事や、精神薄弱児の通園施設の建設を報じた『広報ところざわ』第207号、第8面（1969年7月10日）記事などは、個々の障害者の生活環境や心身の状態を考慮に入れた対応策の周知徹底として重要であるが、ここでは、1958（昭和33）年6月10日に、『所沢市報』第78号、第2面記事で報道された秩父学園開園記事が注目に値する（図1参照）。そこでは、国立重度知的障害児施設設置の目的と理想が以下のように記述されている。このような記述内容を吟味すると、それはセンセーショナルであり、当時の国会論議を踏襲しながら、後続の類似施設の建設を後押しした一因になったと考えられる。

この学園は児童福祉法にもとづく施設で、精神薄弱の程度が著しい児童、又は盲もしくは聾である児童を収容

表1. 『所沢市報』・『広報ところざわ』で報じられた知的障害児福祉関連記事

年月日(面)	タイトル(見出し)	出典	キーワード・要点
1957年9月10日(2)	身体障害者 福祉強調・職業更生 週間	『所沢市報』第69号(2)	自力で更正した水村さん(三ヶ島)はその好例
1958年6月10日(2)	精神薄弱児収容 国立「秩父学園」開園さる	『所沢市報』第78号(2)	国立精神薄弱児収容施設「秩父学園」、児童福祉法、生活指導、作業指導、職業的自立、運動機能訓練、情意の発達
1963年9月10日(2)	県下に誇る老人天国 待望の“亀鶴園”開所	『広報ところざわ』第136号(2)	老人福祉法成立、養老施設、老人天国
1966年4月10日(2)	市民福祉を重点に——新年度の施政方針を述べる	『広報ところざわ』第167号(2)	学校建設、水道事業、基地解放運動、市民福祉
1969年7月10日(8)	精神薄弱児の通園施設を建設	『広報ところざわ』第207号、(8)	精神薄弱児通園施設、児童福祉法、愛護、重度心身障害、保育園(保育施設)、施設専用バス
1970年10月10日(6)	身体障害者などの軽自動車税の減免	『広報ところざわ』第222号、(6)	社会生活、身体障害者、減免申請、身体障害者手帳、戦傷病者手帳
1971年3月10日(2)	松原学園(仮称)が開園 知恵のおくれたお子さんのために	『広報ところざわ』第227号(2)	知恵おくれ、通園施設、児童福祉法、措置入所、健康で文化的な生活、秩父学園、人間尊重
1971年4月10日(4)	幼児から老人までのしあわせを——若い世代のための施策	『広報ところざわ』第228号(2)	教育行政、環境衛生、公害問題、健康、保育施設、予算編成、社会教育、文化財保護
1972年5月(9)	初の市立幼稚園が誕生	『ところざわ』(9)	市立幼稚園、所沢市、遊戯室
1972年7月(3)	市民福祉の向上に努める	『ところざわ』(7)	市民福祉、民生費、衛生費、教育費、財政事情
1972年7月(3)	九月から実施 乳児医療費の無料化——第二回定例市議会	『ところざわ』(7)	乳児医療費の無料化、国民健康保険条例
1972年8月(2)	活躍する奉仕員 世間話しにも花が咲く	『広報ところざわ』第244号(2)	人生70年、敬老の日、老人福祉週間、老人家庭奉仕員、中央社会福祉審議会、高齢人口

【出典】所沢市（1957）『所沢市報』69、～同（1972）『広報ところざわ』244を基に、筆者作成。



図 1. 『所沢市報』で報じられた秩父学園開設
【出典】所沢市 (1958)『所沢市報』78, 2.



図 2. 『埼玉新聞』紙上で報じられた秩父学園開設
【出典】埼玉新聞社 (1958)『埼玉新聞』4877, 5.

しその保護及び指導を通じて、児童の適性能力及び身体
の状況に応じ、社会生活に順応するように育成し、あわ
せて全国のこの種事業の指導・向上を図ろうとする目的
といわれる。明るい陽光と澄明な空気に恵まれた武蔵野
にはるかに秩父連山を望む（この趣から秩父学園と名づ
けられた由）広大な自然環境の中に、明るいスマートな
建物は、収容児の運動機能訓練や情意の発達を期待した
ものといわれ、各々の室に施された特殊の設計や設備は
職員の努力とともにこの期待を十分に果させ児童たちも
やがてしあわせの国にみちびいてくれるものと信じられ
る。……（『所沢市報』1958:78 (2)）。

(3) 『日刊新民報』（旧『所沢民報』）・『埼玉新聞』記事の 分析から

一方、より地域住民たちに身近な市町村では、知的障害
児をめぐる福祉ニーズがいかに把握され、さらにどのよう
に情報伝達されていたのであろうか。この点については、
各地の民報紙に要点が含まれていると考えた。まず、1954
（昭和29）年～1957（昭和32）年までの4年間における『日
刊新民報』⁶⁾（旧『所沢民報』）記事を分類・整理したもの
が表2である。ここでは、「知的障害児福祉ニーズ」、「知的障
害児研究」、「保育所」、「その他」の4つに区分し得た。「知
的障害児福祉ニーズ」では、「投書」欄において、母親に関
係者からの願望が伝えられていることは注目される。例え
ば、宮本町 TH 生による「精神薄弱児の対策を」と題した
文章は、文部省（当時）のあり方の根本を糾弾するもので
あり、関係者たちの怒りに似た心情を率直に汲み取る。

……昭和30年度からはじめて、文部省で養護学校設置
補助金を出してその創設は奨励されるといわれながら、
見せかけだけで養護学校に生徒を入れたとたんには彼等は

義務教育からはずされ教材費をもらえなくさせられたり、
義務教育関係の国庫補助を受けさせなかったり、馬鹿げ
たやり方をやっている。これら行方の根本に、馬鹿に金
をかける位なら秀才にという偏重的な利口で馬鹿のしじ
み売を作る愚を敢てしているのである。私はこのことに
ついて大いに難詰する者であり、だから山畑議員の論に
大賛成であり、市当局の速やかな対処策を講ぜられるこ
とを要望する。（日刊新民報社 1956:914 (2)）

上記内容のなかに登場した山畑（武雄）議員の発言は、
同紙第915号、第1面においても、「精薄児の対策は社会福
祉事業のなかでも重要なものであるが、特殊学級や『手
をつなぐ親の会』への助成を図りながら、役員会で具体化し
たい」（日刊新民報社 1956:915 (1)）ととり上げられ、こ
うした議論を経て、その後、「精神薄弱児と給食」の問題が
検討されるに至っている。また、同紙第1226号、第1面記
事では、「精薄児の施設を所沢へ 市内の識者は誘致に立上
る」（日刊新民報社 1957:1226 (1)）と報じられ、秩父学園
創設の土台形成の一因になったと考えられる。

但し、このような知的障害児をめぐる福祉ニーズの言及
は、世論を喚起する上では有効であると考えられるものの、
言い放しでは効果がなく、知的障害児をめぐる環境改善
への具体的な働きかけがないと、知的障害児福祉の実質的
向上につながってこないことは言うまでもない。そこで、
注目されるのが「知的障害児研究」である。ここでは、と
りわけ、所沢小学校の新井雄雄が昭和31年度研究発表の成
果を報告し、以後3回にわたり連載されていることが注目
される⁷⁾。新井の主張は、精神薄弱児教育についての「編成
手順」「対象児童」「指導経過」「指導内容」などかなり突っ
込んだ内容となっており、その成果が未完成ではあるもの

の、教育関係者や福祉関係者の手がかりになったものと推察される。

その他、『日刊新民報』では、知的障害児施設のみならず、健常児のための保育所そのものの数が足りないこと、3才までの生活のあり方の留意点、映画上映（『しいのみ学園』）の情報など、児童福祉一般に関わる内容が広く伝えられていたことが看取できる。さらに、図2のように、『埼玉新聞』紙上では、『秩父学園』店開きへと題して、初の国立精神薄弱児施設の誕生が県域的に大きくとり上げられた。「忘れられた子らに愛の手」とされるように、知的障害児たちの幸福が、漸く具体策をもって本格的に検討され始めた兆しが窺える。

3. 研究結果Ⅱ：秩父学園への入園事例の検討 ——和久井千代の場合

(1) 入園の経緯

上記のような報道は関係者の注目を集めただけでなく、関係者自身たちの主体的活動や団体行動の振起をも促したことは容易に想像される。しかし、秩父学園への入園ですら、「宝くじ並み」と表現されるように激戦であり⁸⁾、ほんの一握りの者だけが入園を許されていた実情にあった。つまり、逆説的にいえば、多くの知的障害児福祉ニーズに答えられていなかった実態が浮き彫りになろう。ここでは、そうした数少ない事例のなかから、『手をつなぐ親たち』に

表 2. 『日刊新民報』（旧『所沢民報』）に寄せられた知的障害児福祉ニーズ

分類	年月日(面)	タイトル(見出し)	出典	キーワード・要点
知的障害児福祉ニーズ	1956年6月12日(2)	[投書]精神薄弱児の対象を宮本町・TH生	『日刊新民報』No.914(2)	精神薄弱児問題、白痴、痴愚、劣れる善人、学校教育法、養護学校、特殊学級、国庫補助
	1956年6月13日(2)	精薄児や給食の対象もきのう社会福祉協議会の総会	『日刊新民報』No.915(2)	精神薄弱児、所沢市社会福祉協議会、学校給食、生活保護法、学校後援会、世帯更生資金、母子資金、特殊学級、「手をつなぐ親の会」
	1956年6月21日(2)	[投書]所沢に精薄児の施設を大島の愛読者より	『日刊新民報』No.923(2)	社会福祉協議会、精神薄弱児対策、所小・小手指小、特殊学級、幸福、平和と愛、楽園、未亡人母子福祉会、保育園
	1957年4月29日(1)	“精薄児の施設を所沢へ”市内の識者は誘致に立上る	『日刊新民報』No.1226(1)	精神薄弱児指導施設、「旧所高跡」、全員協議会、招致運動、精神薄弱者も人間
	1957年6月18日(1)	精薄児施設所沢に決るきのう旧所高跡の測量を始む	『日刊新民報』No.1275(1)	旧所高跡、所沢市役所、精神薄弱児施設、最適の候補地
	1957年9月6日(1)	手をつなぐ親の会も結成し精薄児の父兄起つ	『日刊新民報』No.1355(1)	所沢小学校、特殊学級、「手をつなぐ親の会」、特殊学級の増設、養護学校ならびに職業補導施設の設置、民生委員、小手指小学校
知的障害児研究	1956年6月23日(2)	特殊教育の研究 県指定を受ける	『日刊新民報』No.925(2)	小手指小学校、特殊教育、特殊学級、研究参観(信篤小学校、村櫛小学究)、研究発表
	1957年4月28日(2)	精薄児教育への第一歩(1)一昭和31年度研究発表より	『日刊新民報』No.1225(2)	精薄児教育、所沢小学校、自己の劣等感、教育の機会均等の原則、特殊学級、生活行動、指導手段、記録「かたつむりの歩み」、観察簿
	1957年4月29日(2)	精薄児教育への一歩(2)一昭和31年度研究発表より	『日刊新民報』No.1226(2)	精薄児教育、所沢小学校、編成手順、大西谷先生(教育大)・矢崎先生(埼玉大)、診断、親の承認、知能指数、特殊学級、境界線児、カルキコラム、フラストレーション、パースナリティ、行動観察記録、性格調査
	1957年4月30日(2)	精薄児教育への一歩(3)一昭和31年度研究発表より	『日刊新民報』No.1227(2)	精薄児教育、所沢小学校、集団秩序、普通学級、精薄の理想像、「希ましい社会人」・「円満な生活者」・「人間の完成」、自己分析、生活指導、研究会
	1957年5月20日(2)	「智恵おくれた児」教育 あす所小で研究会ひらく	『日刊新民報』No.1246(2)	知恵のおくれた児童、特殊教育、体験報告、文部省・厚生省の講演、算数教育、言語教育、辻村泰男(文部省特殊教育室長)、渥美節夫(厚生省児童局養護課長)
保育所	1954年3月7日(2)	どうぞ保育所をつくって下さい所沢の一女性	『所沢民報』No.200(2)	児童憲章、児童福祉法、未亡人母子福祉会、保育所、所沢市
	1954年7月9日(2)	“保育園を増築せよ”二階で遊ぶ園児たち 飯能	『日刊新民報』No.304(2)	飯能保育園、田中観光課長、保育所増設、市営住宅建設
	1956年12月11日(2)	[かいせつ]保育所はなぜふえないのでしょうか	『日刊新民報』No.1095(2)	保育施設、保育所、乳児所、児童福祉関係予算、事業所得税、施設最低基準、人命尊重、子どもの宮殿、国民の自主的管理
	1957年2月17日(2)	三才までの保育の注意	『日刊新民報』No.1157(2)	中央児童相談所、乳幼児保育、乳幼児託児所増設、保育所予算、増設運動、昼夜保育、昼間乳児託児所、託児所要求
その他	1955年9月17日(2)	[投稿]新生活運動の本質	『日刊新民報』No.664(2)	新生活運動、社会浄化、国民の真の幸福と繁栄、生活の合理化簡素化、
	1956年9月1日(2)	大会上映映画 “しいのみ学園”	『日刊新民報』No.995(2)	「しいのみ学園」、全国40万の恵まれぬ子供たち、就学猶予、小児マヒ、化学治療不能、愛情
	1957年5月13日(1)	きのう身障者の総会ひらく 会長は金子光一さんが留任	『日刊新民報』No.1239(2)	所沢市身体障害者福祉会、役員選出

【出典】日刊新民報社（1954-1957）『日刊新民報』200-1355.を基に、筆者作成。

数度、掲載された和久井千代の事例をとり上げる⁹⁾。この具体的な事例検討を通し、秩父学園創設の意義の考察へとつなげたい。文京盲学校支部という肩書きであった当時の和久井は、二重障害の息子が秩父学園へ入園以後、秩父学園親の会会員として親の会活動の展開に尽力しているが、いかにして息子が入園を許可されたのか、またその当時の知的障害児の生活の実情についても、これまで十分明かされてこなかった。まず、和久井はわが子に対し二重障害児としての問題を実感するまでの経緯を次のように明かす。

子供がまだ家庭に居る間は唯、(目が)見えないということ丈をなげき知能のおくれは見えないからと許り考えて今に学校に行くようになればもっと伸びて行くものと思ひこんでおりました。盲児だからと無理強いもせず、人中にも出さず家の中にばかり長い間とじこめて置きました。入学適齢期にはやはり幼ないことをひけめに感じ一年延ばしていただきました。それから一年たって、いよいよ入学という時に子供といっしょに行ってみますと、余りにも差のあることに気が付き、いたたまれない思いでした。先生からは、「どうして変だと云うことに気が付きませんでしたか」と云はれても親はまだ見えないからとばかりしか考えておりませんでした。……(和久井千代 1957:44)

このように自省的に述べる和久井は、わが子の成長・回復の希望を捨てきれず、多くの病院や児童相談所を駆け巡ったという。しかしながら、知能指数の低さが様々な可能性を阻み、「何処に行っても相手にされないと云うことは教育の対象にならないと云はれたこと丈で、すべてつきてしまい共に目のくらむ思いを抱いた」(和久井 1957:44)とやるせなさを述べる¹⁰⁾。続けて、わが子の生活状況や問題の実情について、以下のように言及する。

現在私の子供は盲学校の五年生ですが朝になっても声をかけなければ起き様ともせず顔も満身に洗えず何をやるにも一言一言をかけなければやれない子供です。学校に通う途中、ところかまわず赤ん坊の様にぐずられて本当に手こずることが度々です。その様な思いをして学校に連れて行きましても、先生方が全然子供を見てくれず親達で見て帰る日がどんなにあったか知れません。それでも親としては学校に通うことが捨てきれず、まだ成人に達していないと云う素人考えの未練からなんとか盲精薄児に対する教育の在り方をもっと研究して頂けないものかと願いつつ学校にも通い続けて居ります。……(和久井 1957:44)

知的障害児に対する周囲の理解や対策が芳しくなかった当時、親たちの強い思いや祈りのみが、現状打破への希望となっていた。そして、終始、和久井の心の内奥で渦巻いていた不安こそが、「いったいこの子供が大人になったらど

うなることでしょう。今私達(親達)が丈夫で居る間は何とか見て行けますが年を取ったり死んだあとどうなることか」(和久井 1957:45)というものであった¹¹⁾。その苦悩の甚大さは、「いっそ今のうちに共に死んだ方が良いかなどと考える時もあります」(同)という和久井の弱音にも似た証言からも窺える。知的障害児の親にこのような心情が芽生えること自体、当時の知的障害児福祉施策の不備を如実に物語っている。反面、嘆き悲しむだけではなく、和久井は、国立の知的障害児福祉施設創設に対して、以下のように切願する。「安心して死んで行ける……」という箇所にその思いが端的に表れている¹²⁾。

私の子供は盲精薄であります、本年ろう精薄のふた児と共に心中された塚本さんの御気持もよくわかります。どうか自活能力の殆どないこの子供達を収容して下さる国立の施設を一日も早くつくって頂いて、私共も安心して死んで行けるようにして頂きたいものです。私はこのためにはどんな御協力もさせて頂きたいと考えております。(和久井 1957:45, 傍点筆者)

(2) 入園後の子どもの変化

上記のような実情や要望から、和久井の息子は秩父学園への入園を都内から4人のうちの1人として許可されるに至っている。それほど、和久井の場合、緊急性が高かったともいえ、これまでの苦労が偲ばれる。「清一をお願いして帰る時が来ました。生まれてはじめて私と離れた時の清一が先生方を困らせ、また手こずらせるのではないかと、多少不安が私の胸の中を乱しましたが、育成会の幾野先生の奥様から、子供を離れた時の予備教育とでも申しませうか、学ばせていただきましたお蔭で、早く落ち着くことができました。」(和久井 1958:15)と入園当時を和久井は振り返っている。加えて、実際に秩父学園での生活を経験したわが子の様子を次のように述べる。

……学園に入れていただいてから一月が過ぎ、清一の様子を知らせていただきました。割合に集団生活にも慣れていて、特別に先生の世話もやかさない、歌も良く歌うとの知らせでした。好きな歌が歌えるようでは幸せなのでしょう。重症なあ清一がもし六年間の学校生活をせずに学園に入ったとしたら、おそらくこのような良い結果が出ないでしょう。精薄教育の義務化の重大さをつくづく感じました。……(和久井 1958:15)

知的障害児教育の必修化を望みつつ、このような好結果をみた学園の取り組みに感謝の意を述べ、秩父学園のさらなる発展を祈る一方、和久井は入園できなかった多くの知的障害児及びその親への配慮と、親同士のさらなる結束の必要性を以下のように言及している。知的障害児の生活や将来の不安を実体験した和久井であったからこそ、そうした思想や信条が芽生えたと推察される。こうした思いは重要であり、当時の知的障害児福祉ニーズの盲点を照射し、

表 3. 『手をつなぐ親たち』に掲載された和久井千代の苦労体験及び思考

タイトル	和久井の所属(当時)	出典	要旨
二重障害児を持った親の悩み	文京盲学校支部	『手をつなぐ親たち』No.9・10 合併号, 1957 年 1 月, 44 頁。	私は全然目が見えない上に精薄で知能指数 40 の満 12 歳になる男の子を持つ親として歩んできた悩みを申し上げます。……あれから 4 年になります。体だけは親よりも大きくなろうとしているのは喜ぶべきなのにかえって淋しさを感じる此の頃の情なさです、出来ることなら体が大きくならないでいて欲しいと毎日神に祈ります。……私の子供は盲精薄でありますが本年ろう精薄のふた児と共に心中された塚本さんの御気持もよくわかります。どうか自活能力の殆どないこの子供達を収容して下さる国立の施設を 1 日も早くつくって頂いて私共も安心して死んでいけるようにして頂きたいものです。私はこのためにはどんな御協力もさせて頂きたいと考えております。
見知らぬ学生に励まされて	不詳	『手をつなぐ親たち』No.25, 1957 年 4 月, 3-4 頁。	……昨年 1 月なかごろでございました。今日も清一を連れて学校の帰り道、モシモシと後から声をかけられ何の気もなくふりかえりますと、男の大学生が立っていました。「突然で大変失礼ですが坊やに何か買って上げて下さい」と言われ、私にお金を 500 円下さるのです。私もびっくりいたし、何をどういふに言うてよいかわからずに夢中で御辞退申し上げます、「僕が何か買ってあげればよいのですが、男でわかりませんから、坊やの好きな物を何か買って上げて下さい。僕のお母さんへの感謝の気持です」といわれ、無理ににぎらせ立去ってしまったのでございます。……私は家に帰りますと同時にうれし涙がこみ上げて来て、しばらく泣いてしまいました。不幸な子どもを持たなくては、このようなことを味あうことは絶対にできないことでございます。……
わが子を秩父学園にお願いして	不詳	『手をつなぐ親たち』No.31, 1958 年 10 月, 15 頁。	盲と精薄の二重障害児を国立秩父学園におねがいしまして、丸 1 か月が過ぎました。心から感謝いたしている母親でございます。生後 13 年間、特に 6 年間の盲学校生活というものは精薄教育が義務化されていないため一歩先が真暗で、毎日が不安で不安でたまりませんでした。東京から 4 名という少人数の 1 人に加えられ去る 7 月 4 日に入所したのでございます。……学園に入れていただいてから 1 月が過ぎ、清一の様子を知らせていただきました。割合に集団生活にも慣れていて、特別に先生の世話もやかせない、歌も良く歌うとの知らせでした。好きな歌が歌えるようでは幸せなのでしょう。重症なあおの清一がもし 6 年間の学校生活をせずに学園に入ったとしたら、おそらくこのような良い結果が出ないでしょう。……諸先生方の教育のたまものと深く感謝するのみでございます。この幸いは全国の皆様のお蔭と喜んでおります。私はこの幸せを忘れず力のあるかぎりこの子供たちのために努力する覚悟でございます。最後に秩父学園がもっとな学園に成長して下さいよう心から祈ります。
二重障害児をもって	秩父学園親の会会員	『手をつなぐ親たち』No.68, 1961 年 11 月, 93-94 頁。	……意志の非常に強い元気のある仲野先生には単刀直入に親のありかたなどを教えられおくれればせながら皆さまのお力をおかりして二重障害児の施設を国で作っていただくよう会員の方々、とくに岡田様、幾野様、堀内様と共に陳情にまいりまして、とても力強く励まされ、ありがたく思っております。ある時などは、仲野先生をリーダーに大蔵省に盲精薄の子どもを連れて陳情にまいりまして、親の悩みから子どもの状況をすっかりお話をしお願いいたしまして帰ってきました。数日後、その時のお役人に残酷だと仲野先生はお叱りを受けられたとか、本当に迷惑をかけました。その後各省に陳情にまいりますと、お役人の中には、あの仲野先生にはまいったとかおっしゃる方もあり、私は心の中で力強いなと思ひ、仲野先生のような方がおられるから私も親子は幸せ者だと感謝しました。あの時の気持は一生忘れられることはできません。……反面、数千余名に及ぶ入園希望者の中から百余名がまず入園を許可され、入園できなかった方からお宅はよかったですねといわれますと、胸のつまる思いでございます。皆さまのご協力によって細い道は拓けているのですから、私たち親はもっとしっかり固く手をつないで、この子らの幸せのために道を広げたいと存じます。ご協力をお願いする次第でございます。

【出典】全日本手をつなぐ育成会（1957-1961）『手をつなぐ親たち』9・10-68 を基に、筆者作成。

個々のケースへの対応と組織活動の展開を、雑誌メディアを媒介にして推し進めた一因になったと考える¹³⁾。

全国の皆さまのおかげで去る昭和 33 年 6 月、知恵の遅れた子らを持つ全国の親たちの多年の念願であった国立秩父学園が開設され私の子どもも同年の 7 月 4 日入所させて頂き、毎日明るく行きとどいた保護と指導を受けて能力の限りを発揮することができますことは、親としましてこの上ない幸せでございます。反面、数千余名に及ぶ入園希望者の中から百余名がまず入園を許可され、入園できなかった方からお宅はよかったですねといわれますと、胸のつまる思いでございます。皆さまのご協力によって細い道は拓けているのですから、私たち親はもっとしっかり固く手をつないで、この子らの幸せのために道を広げたいと存じます。ご協力をお願いする次第でございます。（和久井 1961:94）

4. 考察——秩父学園創設の歴史的意義

以上、秩父学園誕生の背景を明確にすることを意図し、ニーズ分析と入園事例の詳細を、当時の国会会議録のほか、

地元新聞紙や機関誌の記事などを紐解きながら明らかにした。そこでは、当時、あまりにも未整備であった知的障害児策が国や地方自治体で早急に検討されようとしていた実態が浮上してきたが、そのみならず、知的障害をもつわが子との実生活を通じ、現在のみならず将来のわが子の行く末を懸念した親たちの切実な願いがあった。これこそが、この領域における公的支援を導いた鍵要因であったと考える。では改めて、日本初の国立重度知的障害児施設である秩父学園誕生の歴史的意義とはいったいいかなるものであろうか。

この点にアプローチすべく、ここでは、図 3 を作成し、[A 知的障害児福祉ニーズ]、[B 知的障害児研究]、[C 秩父学園創設]の各々の関係を以下のように位置づけた。A とは、すべての知的障害児の福祉ニーズを表し、B とは、知的障害児研究の対象になり得る程度・状態の知的障害児たちを内包していることを表す。C とは、B と同様、知的障害児研究の対象とならなければならない知的障害児たちを含んでいるが、重度障害や重複障害など相当の配慮を要するある特定集団ということになる。すなわち、この集団は旧来、後回しにされていた一群であり、特定集団への対応を初めて試みたのが秩父学園ということになる。

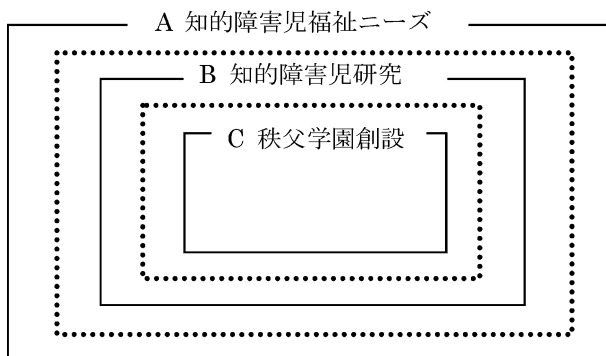


図 3. 知的障害児福祉ニーズの発生と対応

【注】A → B → C は、表 2 の分類と関係している。各々の点線部分に残されたニーズの存在が指摘でき、秩父学園創設は、こうした潜在的ニーズを照射し掘り起こしたところにも一つの果たし得た役割が窺える。

【出典】筆者作成による。

換言すれば、[C 秩父学園創設] は、従来、研究対象となり難かった集団を対象化し、その幸福追求や可能性の伸長を模索し始めていたところに先進性があった。このことは、難解とされた重度重複障害児への福祉実践のありようを根本から見直す契機となったばかりか、世の中に埋もれている多くの同様の障害児やその親たちが、社会福祉の対象として社会的に救済されるべき存在であると認識され始めたことに他ならず、社会福祉実践領域の裾野を拡充したところに大きな意義があったと考える。他方、[B-C 重度・重複障害であるにもかかわらず、秩父学園に入園できなかった知的障害児] (図 3 中の点線部分) や [A-B 知的障害児福祉ニーズを有しているのに一向に研究対象となれない知的障害児] (同) など、既定の枠内に入り切れなかった多くの知的障害児とその親の存在も確認できる。同学園創設がこうした新たな福祉ニーズを掘り起こしていたところにも意義が認められる。なお、秩父学園のその後の実践や変遷の詳細については、学園内部資料や『秩父学園 50 年誌』・『秩父学園 30 年誌』などを紐解く必要がある。

おわりに

本稿では、秩父学園創設の背景要因の探究として、知的障害児をめぐるニーズの高まりと、国会会議録及びメディア報道の内容を主に考察してきた。まず、同学園誕生以前の所沢地方には、「知的障害児福祉ニーズ」、「知的障害児研究」、「保育所」、「その他」の 4 視点から捉えられる各種情報が、『日刊新民報』や『埼玉新聞』という地元新聞紙を介して伝えられていたことが、学園創設の受容を促進していたことを明らかにした。次いで、『埼玉新聞』や『所沢市報』などに「秩父学園開園」が大きく報じられたことから、知的障害児福祉の推進のみならず、当事者や関係者ら多くの人々を勇気づけていたことを明確にした。

しかしその一方、機関誌『手をつなぐ親たち』に掲載された和久井千代の事例に着目すると、それが氷山の一角で

あり、必ずしも大多数のニーズに呼応できていない実態が明らかになった。加えて、年月とともに成長する知的障害児の成人後や親亡き後の生活保障や生命尊重のあり方が現実問題として切実に認識され始めていたことも明らかになった。知的障害児に対し、本来ならば、そうした障害の程度や生活環境に照らし合わせながら、個々の幸福が十分護られ続けられなければならないはずの存在であるのに、重度障害や重複障害であるが故に、生活支援や教育実践が受けられないという現実が、不幸な、悲惨な状況を招くのだと認識された。そして、そうした惨状を招聘しないように、さらには、知的障害児にとっての楽園となるべく、大きな期待のなかで誕生したのが国立重度知的障害児施設「秩父学園」であったと結論づけられる。ここに、重度知的障害児福祉観の成立の端緒がみられた。

本論は、秩父学園誕生の背景と入園事例の検討という限定的な考察に終始した。同学園初代園長、菅 修の思想や実践の解明、同学園のとり組みの実践的効果の究明、さらに、同学園と近江学園など他施設との関わりの検討など、残された研究課題は少なくない。

文 献

- 梅谷忠勇・堅田明義・生川善雄 (1979) 「精神薄弱児・者の弁別学習機制に関する研究」『千葉大学教育学部研究紀要・第 1 部』28, pp. 77-85.
- 厚生省 (1958) 『昭和 33 年度版 厚生白書』.
- 厚生省 50 年史編纂委員会編 (1988) 『厚生省 50 年史 (記述篇)』.
- 国立秩父学園 (1968) 『10 年誌』 (日本社会事業大学図書館蔵).
- 国立秩父学園 (1980) 『20 年誌』 (埼玉県立浦和図書館蔵).
- 国立秩父学園 (1988) 『30 年誌』 (国立国会図書館蔵).
- 国立秩父学園 (2010) 『秩父学園 50 年誌』 (国立国会図書館蔵).
- 埼玉新聞社 (1948~1958) 『埼玉新聞』 (埼玉県立浦和図書館蔵).
- 笹本治郎 (1968) 「精薄者の“席”を社会の中に—国立秩父学園付属保護指導職員養成所を訪ねて—」『健康保険』22 (2), pp. 66-72.
- 指導誌編集委員会編 (1991) 『地域福祉と権利擁護』 (手をつなぐ親たち号外).
- 鈴木四季 (1990) 「障害者福祉施設等の処遇に関する一考察」『国立秩父学園付属保護指導職員養成所所報』.
- 青少年問題研究会 (1959) 「国立秩父学園を訪れて——ルポルタージュ」『青少年問題』6 (9), pp. 56-61.
- 全厚生秩父学園支部 (1976) 「ただ、あたりまえの労働者として——『精薄』施設・秩父学園における職業病闘争」『月刊労働問題』(227), pp. 54-59.
- 全厚生秩父学園支部有志 (1976) 「障害者施設労働者のディレンマ——障害者・福祉労働者の解放をめざして」『現代の眼』17 (9), pp. 266-275.

- 導を加える必要がありますので、この国立の施設に入所した児童につきましては、その者が社会生活に順応することができるようになるまで在所させることができるようにいたしました次第であります。……」と述べ、ニーズの高さを指摘する（『第 26 回国会参議院社会労働委員会会議録』第 22 号、1957 年 4 月 16 日）。
- 5) 1958（昭和 33）年度の新春挨拶として、所沢市議会議長（当時）小暮勘一郎は、「……戦後地方自治制度が確立致し地域住民の福祉増進を根幹とした政治に重点がおかれておりますが、地方自治の究極の担い手は市民の皆様であります。私共市民の信託を受けて議員となったものはその信に応えるべく年改った此の機会に更に深く反省し、地方自治の本義を基き、市民の福祉増進に一層の努力を続けたいと念願するものであります。……」と述べ、福祉施策が支柱の一つであることを明言している（所沢市『所沢市報』第 73 号、1958 年 1 月 10 日、第 1 面）。こうした市政方針も秩父学園創設を加速させた一因であったと考え得る。
 - 6) 『日刊新民報』とは、日刊新民報社が埼玉県所沢市で編集・発行・配布する日刊の市域地方新聞（地方紙、通称みんぼう）であり、ほぼ同じ地域を対象とする家庭新聞社の『家庭新聞』も競合しているなかで、『日刊新民報』は 1952 年の創刊以来 50 年以上有料日刊を継続している新聞メディアとして貴重なものと言える。したがって、同紙は所沢地方史を紐解く上で不可欠な新聞メディアの一つであると考ええる。
 - 7) 典拠は、日刊新民報社『日刊新民報』No.1225、1957 年 4 月 28 日 (2)、同紙 No.1226、1957 年 4 月 29 日 (2)、同紙 No.1227、1957 年 4 月 30 日 (2)。なお、所沢小学校担任当時の新井迪雄は「個々を生かす教育」の展開を志し、のちに、同小が 100 周年記念を迎えた折には、「栄えある伝統と誇りを胸に新たな躍進をはかりたい」と同校校長としての言葉を新井は残している（www.tokorozawa-stm.ed.jp/.../231013%20所小の風 No.20.pdf 2012 年 8 月 12 日取得）。
 - 8) 典拠は、全日本精神薄弱者育成会（1976:24;1981:52）。こうした知的障害児施設のみならず特殊学級への入学も容易ではなく、仲野好雄（全日本精神薄弱者育成会理事長、当時）は、「昭和 27 年 5 月 3 人のお母さんと一人の社会教育家の呼びかけに答え、各地から志を同じうする人々が馳せ参じ、同年 7 月日本では初めての障害児の親達を中心とする全国精神薄弱児育成会、別の名手をつなぐ綾の会が結成され 30 年が経過しました。……依然として偏見差別は強く、根元にメスを入れるまでには至っておりませ
 - ん。」（全日本精神薄弱者育成会（1981）『手をつなぐ親たち（号外）』（創立 30 周年記念全日本精神薄弱者育成会〔手をつなぐ親の会〕全国大会）、p.3）と言及している。
 - 9) 知的障害児の親としての当事者の立場から述べた和久井の言説は重要である。なお、埼玉県育成会会長を歴任した加藤千加子の言説も、神龍小学校特殊学級親の会活動を展開した経緯や背景を探究する上でとりわけ注目されるが、ここでは視点が異なるため対象外とし、別稿で論じることとした。
 - 10) 「和久井さんていいましたね、もう亡くなりましたが。その当時、親の会で活発に活動していて、自分の子どもたちの行き場がないと、まるでイソップ物語のこうもりだと。施設に行けばあんたの子どもは目が見えないんだから盲学校へ行けと……。学校に行けばあんたの子どもは知恵が遅れているんだから施設に行きなさいと。両方からオミットされて行き場がないと……。閻魔様だよね。閻魔様が死んだら行き場がないでしょう？自分が閻魔様なんだから。それで、和久井さんも何人かの盲重複障害の子の親御さんたちは国立秩父学園を作ってくれと、で、国立秩父学園では必ず盲重複障害のコースをこしらえてくれと。……」と田ヶ谷雅夫は学園創設の背景を保護者の立場から言及している（2012 年 3 月 12 日、筆者による田ヶ谷氏への聞き取り調査の結果より）。
 - 11) この和久井の論述は、1958（昭和 33）年 3 月 18 日、第 28 回国会参議院社会労働委員会で、「……成年に達するとなかなか処理のむずかしい問題もあります」と述べた石田国務大臣の見解と概ね合致している（『第 28 回国会参議院社会労働委員会会議録』第 23 号、1958 年）。昨今の対策としての成年後見制度は果たして十全といえようか。
 - 12) なお、親亡き子に関する障害児・者関連のこれまでの主要な研究論文としては、夏堀 撰（2003）「障害児の『親の障害受容』研究の批判的検討」『社会福祉学』44(1)、pp.23-33、同（2007）「戦後における『親による障害児者殺し』事件の検討」『社会福祉学』48(1)、pp.42-54、同（2011）「1950 年代における知的障害児の母親モデルの形成」『家族社会学研究』23(1)、pp.77-88。などがあるので参照のこと。
 - 13) 手をつなぐ親の会活動の発展過程については、全日本精神薄弱者育成会（1976）『手をつなぐ親たち—25 年の歩みとこれからの親の会活動』（創立 25 周年記念全国大会資料）、同（1981）『手をつなぐ親たち（号外）』（創立 30 周年記念全日本精神薄弱者育成会〔手をつなぐ親の会〕全国大会）、指導誌編集委員会編（1991）『地域福祉と権利擁護（手をつなぐ親たち号外）』、全日本手をつなぐ育成会（2001）『手をつなぐ育成会（親の会）50 年の歩み』、などに詳しい。

Background of Establishment of Chichibugakuen which is the First National
Facility for Children with Severe Mental Retardation in Japan:
Analysis of Social Welfare Needs and Case Study of Entrance Facility

Hiroshi NAKASHIMA¹⁾²⁾ and Midori SONOKAWA²⁾

¹⁾School of Veterinary Nursing of Technology, Nippon Veterinary
and Life Science University (a part time lecturer)

²⁾School of Modern Life, Teikyo Heisei University

Abstract

Chichibugakuen was established in June 1958 has achieved revolutionary practices and has attracted attention as the first national facility in Japan for children with severe mental retardation. Nonetheless, prevenient studies have not necessarily clarified the social background and the process of establishment. This paper therefore clarified the environment and the social situation associated with developmentally disabled children in the 1950s, using the Diet minutes search system, local newspapers, local public relations magazines, and a magazine (*Te o tsunagu oyatachi*). In addition, as a response to such welfare needs, we devoted attention to Chiyo Wakui's discourse, who is one of the few examples of a person who actually enrolled their children into Chichibugakuen and who later recounted the signs of change and growth. We elucidated the practices and thoughts of developmentally disabled children, their parents, and other involved people in a sequence of the flow from the formation of welfare needs for developmentally disabled children, the study of developmentally disabled children, to the establishment of Chichibugakuen.

A future challenge is to elucidate the philosophy of Osamu Kan, the first principal of Chichibugakuen, the practical effects of Chichibugakuen, and cooperation between Chichibugakuen and other facilities, using the results presented in this paper as a point of departure.

Key words : the national facility for children with severe mental retardation, Chichibugakuen, Chiyo WAKUI, meeting for "*Te o tsunagu*" parents, welfare for children with severe mental retardation

Bull. Nippon Vet. Life Sci. Univ., **61**, 87-97, 2012.